



八代集抄

金葉雜上下

三十一

特別
イ 4
3163
104(31)



貴  
14  
3163  
104(31)



雑部上 雑上

雑部のりあこる集

まぐ河

じう道方のまぐ河

又君乃大宰師のまぐ河

おりの時経信のまぐ河

たむせのまぐ河

安樂寺拾苾云天神

号天満宮在大宰府

我仁子 経信のまぐ河

乃嘉保元年六月大宰

権師子遷されのまぐ河

神垣のまぐ河

孫信七十九果の時

金葉和歌集卷第九

雑部上

じう道方のまぐ河

ありて安樂寺のまぐ河

今きり乃梅の我のまぐ河

ハおあのまぐ河

ちわてのまぐ河

てよめる 大納言経信

神垣のまぐ河

こもにのまぐ河



延治二年十月廿六日  
 奉旨入春入の順の  
 宗のりし村入の  
 山家寺とていふ  
 持政の女官  
 山家寺とていふ  
 持政の女官

延治二年十月廿六日  
 奉旨入春入の順の  
 宗のりし村入の  
 山家寺とていふ  
 持政の女官  
 山家寺とていふ  
 持政の女官

延治二年十月廿六日  
 奉旨入春入の順の  
 宗のりし村入の  
 山家寺とていふ  
 持政の女官  
 山家寺とていふ  
 持政の女官

延治二年十月廿六日  
 奉旨入春入の順の  
 宗のりし村入の  
 山家寺とていふ  
 持政の女官  
 山家寺とていふ  
 持政の女官

還乃差とさかたは  
順の著れ時を也  
ふいけぬ柄と作し  
お月斗れりこよめ  
まうまにあらねと  
去昔云只今我を記  
なわぬ人かんと  
ひくま亦死も我  
とわぬ人かんと  
云心務わるとされ  
法身よ衆とされと  
とのしはむさうと  
ちゆいゆまやうり  
時空はたむしよふ常  
くる物をえたりと

花よりかりりしる人な  
源河院時致上人あきこもりて  
修験道  
花見よあまきりる小和寺の別宗  
胡長とことづらく檀紙やあ  
ほねく結られけりてとてうま  
出村結りる奇源外宗胡長  
くとせり我ありぬんま人乃  
花んまきりるまうりしはうん  
山里よ人こまりりて花のまよ  
康和四年の家  
みりるまよめる源定信源信家子  
刑了大補

時のよふとくつとく  
又作也  
くまはの我がのぬん  
仁和寺りこころてゆ  
乃まゆまゆりて年一  
まふまふ也  
千人んそこのふらり  
時ふありぬ迷悟も也  
いふんこふまゆりて  
花のまゆりてまゆり  
こころの形あつてゆ  
とやまゆりてまゆり  
千人んあまゆりて  
まゆりてまゆり也  
まゆりてまゆり也

千人んそこのふらり  
花りてまゆりてまゆり  
まゆりてまゆり也  
春露言とてまゆり  
まゆりてまゆり也  
まゆりてまゆり也

源河院時致

源定信

除目れりとの異進  
すゝとやめりともや  
年よれと春よまらぬ  
春の芳木時をうら  
首をれりとも理本と  
そ時をえきともと  
春よまらぬとも  
下後身よしりとも  
所時亦乃陪従 石鏡  
松原の所時亦乃  
最多條陪云陪従  
舟人とも十二人位  
六位各一人  
中よりとも  
所時亦乃棟頭

年よれと春よりまらぬ理本と  
花乃子やこにすむのひとも  
六人ありて所時乃松の陪は志傳  
りとも中女伊家りとも  
下りとも 松原惟信朝臣  
中よりとも  
中升乃りとも  
松原大宰師は二  
乃りとも香推津社りとも  
りとも小神とも

五位系人住下に賦  
了りとも  
二六友舞人三  
三山吹とも  
脚とも  
これ中上の様  
香推津社統  
天皇廣成神功皇  
るとも  
わとも  
心と  
源心座王山身  
兼三年住とも  
大僧都とも  
年をとも

わとも  
よめりとも  
らとも  
少りとも  
源心座王  
りとも  
年をとも  
りとも  
松原基清りとも

たつとつゆの八座主  
り何とく業とら  
あはれ地ちとら  
けしこ

甲のいねをいへる  
屏風を天より吐  
出六部人となりて地  
中よりして地上と志  
いふ人との心と後り  
一宮宮儀のよ仁等寺一品  
言

くより花をいへん  
わの子年より花をいへん  
い信義のわの神代のわ  
まけりへる

まわりく何りりくねた又り目  
けりりりりり 藤原家總

あしひくねたをいへる  
甲乃わをいへる  
一宮宮儀のよ仁等寺一品  
日比津念仏のよ仁等寺一品  
人信義のよ仁等寺一品

りりりりり  
くより花をいへん  
わの神代りりりりり

田家老翁といふるをよめる

中納言基長

まより花をいへる  
まより花をいへる

仁和寺よりすまをいへる  
まより花をいへる

あしひくねたをいへる  
あしひくねたをいへる

大蔵乃筆のいへる

まより花をいへる  
まより花をいへる  
まより花をいへる  
まより花をいへる

あしひくねたをいへる  
あしひくねたをいへる  
あしひくねたをいへる  
あしひくねたをいへる

明らるる

草のつれをとりて  
草菴乃恒居を日  
比の露なりとまひし  
りてあつとねせ  
乃嵐もれ袖なる  
るこもよもやとら  
きたる男やうきもの  
眺れせせせまら  
とせりあし一吉奈著  
即元亨庚子ちと北  
約書の傳書  
春乃らう一や月つ  
同此のつとこは春  
め日解るるよとこ

僧正行書

草乃いふとりて  
しねいふやと袖にぬれたり  
良運法師をうしひきし  
乃とこし白らあしはたし  
きたる男やうきもの  
律師慶範  
春乃らう一や月つ  
みあつとりりさ  
對山結月とつとよめ

はしこつとつとつと

そこつとつとつとつと  
也徳成玉摘花の御月さ  
す野乃こつとつとつと  
あつとつとつとつと  
ひまやれおんを  
つとつとつとつとつと  
このよらうのつとつと  
このよらうのつとつと  
つとつとつとつとつと  
もさり一せ月を初  
身ましくやまんの  
本あまのつとつとつと  
下結乃月れ中不

荻原西季 秀

このよらうのつとつと  
あつとつとつとつと  
山家あつとつとつと  
よめ  
まらるるつとつとつと  
これつとつとつとつと  
山まらう月乃つとつと  
子経のつとつとつと  
乃おちなれつとつと

平康貞女

さひまきとりのわらふ  
あしあふらんとも非  
あふもさひせん  
法をりききりさあや  
うきうきいふこい  
佛の感通のさし我  
洞が事いふさう氣を  
練り着ていれとさ  
かすのやまをわつさ  
あはれもさしれれ通  
公を春日山乃月小  
よとくさき物あり  
くそられぬ我身と  
ねみはしとく也

いりくさふりとに月乃やとほし  
いりわまちとさあやこあさふ  
空法お太政大臣とさあのうさ  
よすらひは月乃あふもせけ  
るりらとれいさく公宮つ乃と  
さうりしけりりりり  
源師光 後法皇子  
かすのやまをわつささる月氣小  
さきぬ谷乃ねもあさりりり

僧都頼基の集の巻

中納言基平子  
光明山空法の南也  
さる金宮の麓みく  
うれま由平家頼  
りり  
うやまうき世を  
光明山こりりみ付  
うらまらさ家  
よやかりの明く  
さるまに無やら  
月とさあさうり  
得生極楽の孫よ  
やちさうりりり  
光明山とさる

僧都頼基光明山よりことり

ねとさうりしけりりり  
楊徳元 從五位下元任孫 忠元子  
うやまうき世とわくいりりり  
くさあさこふぬ乃月をさるん  
あ  
僧都頼基  
さるまに無やら  
るあさこふぬをさるねくうり  
堀子内院 秘まらさうりりり  
郁芳門院いせりりりりり  
れこさうりりりりりりり



とく光明遍照十方  
世界念佛流世極取  
不捨乃ふのたれいあ  
りあられいし  
しやいよりあふ海  
高家のあむいし  
念成就乃喜つゆい  
也能乃極よる者  
とよあり都芳門院の  
法祖母中宮賢子乃  
法母九八子孫無業  
乃教をさしめさう

くろくすく川をわらわら  
さきよめ

中納言隆徳母  
中宮賢子母  
六条右大臣山方  
堀子祖母

しやいよりあふ海  
なりよとあるよもさうせいの  
源仲正しほちち綱子しとわ皇名宮子始め  
まつりしりくく小琴いしく  
さうせいあむいしくさあむい  
くれははまのあひむいし  
くろくすく川をわらわら

九七

こと乃おや松つ風  
新妻女侍乃おね乃  
松乃つよしとよ  
なまのさきく松  
乃松おやしくし  
めく琴ひくあり  
うまれい子世のいし  
あといし  
うましくと松の女  
秋乃文と松を  
中世の松の流い乃  
松風とさくよめ  
うお琴の始めいし  
琴小琴を流氏始  
流乃くしし

さくつひなけ

折津

こと乃おや松つ風  
なまのさきく松  
乃松おやしくし  
めく琴ひくあり  
うまれい子世のいし  
あといし  
うましくと松の女  
うお琴の始めいし  
琴小琴を流氏始  
流乃くしし

内大臣家持

中より居てまじく  
琴乃ねの月のひかり  
心ゆく

琴乃ねの月乃新しむかしのや  
うにまじくのすみのわん

伊勢玉乃二見満あまのよめ

大中長補注

おうけけしむれ  
お祈りいふこと  
いん松の御見立  
みこりよも蔭縁  
まじくまじく  
まじくまじく  
二見満の御小経  
りああるまじく  
よめりまじく

おうけけしむれ乃満のいさげみ  
まじくまじく松乃ひまじく  
宇治お太政大臣布川乃蔭見  
りああるまじくまじく  
まじくまじく

大納言経信

まじくまじく  
お祈りいふこと  
いん松の御見立  
みこりよも蔭縁  
まじくまじく  
まじくまじく  
二見満の御小経  
りああるまじく  
よめりまじく

選子内親王

村上天皇乃世女系代  
乃母院もまじく  
院と

まじくまじく  
お祈りいふこと  
いん松の御見立  
みこりよも蔭縁  
まじくまじく  
まじくまじく  
二見満の御小経  
りああるまじく  
よめりまじく

後人不知

あまれりこれやあられめすまじく  
まじくまじく

選子内親王

まじくまじく  
お祈りいふこと  
いん松の御見立  
みこりよも蔭縁  
まじくまじく  
まじくまじく  
二見満の御小経  
りああるまじく  
よめりまじく

神くまのまのあつらふ  
聖哉乃無院とれ  
神位こよかり  
約くやまの丸殿  
み我をれはるあり  
とまつていへはり  
みろくは神事  
おのの力をまつり  
やれこころり  
一条徳園神と約念  
本丸殿、上作を、  
と古来誤つて徳園  
とこころの丸殿、  
約言をいり丸殿の  
置本あつて徳園

神くまのまのあつらふ  
約くやまの丸殿  
み我をれはるあり  
とまつていへはり  
みろくは神事  
おのの力をまつり  
やれこころり  
一条徳園神と約念  
本丸殿、上作を、  
と古来誤つて徳園  
とこころの丸殿、  
約言をいり丸殿の  
置本あつて徳園

天智天皇 赤文と戸信  
時敏的天皇よりま  
約念乃約念よとあり  
まの時いふ一書者  
はくは名聞くまわ  
あつてと名ありとま  
ゆい離さうと詠め  
也といは心やくい  
神々ののりか  
寺ふまはるあり  
とて中へまをい  
りけれといふ人  
察頭ハ 赤文察のた也  
職原物云伊勢警管察  
頭一人 聖権官 相當從五位下

おのいもかけぬり  
前 赤官伊勢より  
れとて 察頭保後  
かとの井もの  
まかりと  
わとれ  
るこ  
こころり  
前 赤官内侍  
かへとと  
と力あ



夢あれたにうたを  
とらふにあらた  
さ長中よあつたに  
おぼろにさむい  
ハ限なくまを  
とらふにあらた  
家の凡ゆるぬ物  
おまへ森山懐  
つた父が季よ  
人よとて家  
一流乃祖  
借一  
おぼろに  
心をわく

さ長中よあつたに  
おぼろにさむい  
ハ限なくまを  
とらふにあらた  
家の凡ゆるぬ物  
おまへ森山懐  
つた父が季よ  
人よとて家  
一流乃祖  
借一  
おぼろに  
心をわく

あつたにうたを  
とらふにあらた  
さ長中よあつたに  
おぼろにさむい  
ハ限なくまを  
とらふにあらた  
家の凡ゆるぬ物  
おまへ森山懐  
つた父が季よ  
人よとて家  
一流乃祖  
借一  
おぼろに  
心をわく

さ長中よあつたに  
おぼろにさむい  
ハ限なくまを  
とらふにあらた  
家の凡ゆるぬ物  
おまへ森山懐  
つた父が季よ  
人よとて家  
一流乃祖  
借一  
おぼろに  
心をわく

ともし居居するよ  
う古今の和と用  
つよめりし  
海乃なる松と  
東乃精と白毛  
うまくとけいめ  
うまくとけいめ  
つのはれとけいめ  
ぬるねいりま  
ひさ  
そのわたり  
まじり  
く上り  
すじり  
わたり

ともし居居するよ  
海乃なる松と  
うまくとけいめ  
東乃精と白毛  
うまくとけいめ  
つのはれとけいめ  
ぬるねいりま  
ひさ  
そのわたり  
まじり  
く上り  
すじり  
わたり

つよめりし  
海乃なる松と  
東乃精と白毛  
うまくとけいめ  
うまくとけいめ  
つのはれとけいめ  
ぬるねいりま  
ひさ  
そのわたり  
まじり  
く上り  
すじり  
わたり

ともし居居するよ  
海乃なる松と  
うまくとけいめ  
東乃精と白毛  
うまくとけいめ  
つのはれとけいめ  
ぬるねいりま  
ひさ  
そのわたり  
まじり  
く上り  
すじり  
わたり



公治暦元年二月廿三  
 日 鹿東上門院の住見  
 才二十年中ましまり  
 十三年三月月日の  
 月日の夜はあやしが  
 くこの年乃生一も長  
 めるともおさまの年  
 はずりつてを病まかり  
 みるを懐かきあまも  
 草まうくはまの様の  
 様、床と独活まうて  
 とい様の床まかり  
 としておく起しては  
 仰めいしとていよま  
 独活置てあまごま

このこととあまのあらわれあま  
 備正のまよりしてあまの  
 まりてはとめてかてとて独活トコを  
 われ、あまのあまは、はるんて  
 よめる  
 大綱より宗通 大守宗通  
后任通子  
 草まうくはまの  
 けいもあまのこまも  
 男まかりかしてあまの  
 ぼまかきかかるとあま  
 まこせしあまのあま  
 ける

金九十四

といま  
 のまのうつかまのあま  
 童叟がよりあまの  
 月の上白とてま  
 ハ危乃あまの青を  
 仕装まよしおと太  
 餅袋の雉二持すあま  
 してとて叫餅を入  
 るまよしとて或は  
 のまの打つぬまの  
 男の家のうらむ  
 まうくはまの男乃  
 まのまよしとて  
 舞まうけまの  
 まのまよしとて

まよしとて  
 のまのうつかまのあま  
 まよしとてあまの  
 後冷泉院浄時近江乃  
 為まよしとてあまの  
 又せまよしとてあま  
 してあまのあまの  
 まよしとてあまの  
 又せんとおまよしとて  
 けるまよしとてあま

楊井危



こけいばやうにさす  
に書解はぬき文と  
ふひ書といふ前信  
右神貞通おかしき  
ふひ書に世も面白  
いふいふしあす  
こけいばやうにい  
そわり子れはさう  
るな子の手なり  
あり尾ねいしおさ  
らんとさす甲斐  
ふふありぬか女  
遣出るうき月見え  
おしお物とほす  
おしお物とほす

ふひ書に世も面白  
いふいふしあす  
こけいばやうにい  
そわり子れはさう  
るな子の手なり  
あり尾ねいしおさ  
らんとさす甲斐  
ふふありぬか女  
遣出るうき月見え  
おしお物とほす  
おしお物とほす

ひくくくゆりりか  
入のこすゆりりか  
してんしりてん  
さか山家のうき  
あまのつねの  
つねは入はすり  
さいさい風情  
こかれにちりて  
おかしき押し  
おかしき押し  
おかしき押し  
おかしき押し

ひくくくゆりりか  
入のこすゆりりか  
してんしりてん  
さか山家のうき  
あまのつねの  
つねは入はすり  
さいさい風情  
こかれにちりて  
おかしき押し  
おかしき押し  
おかしき押し  
おかしき押し





金胎乃大目也、釋迦、藏、下、り、こ、ろ、こ、小、  
可、り、智、度、院、取、入、衆、  
ま、り、こ、ろ、こ、ろ、こ、行、は、護、  
魔、を、修、け、お、お、お、  
又、人、の、ひ、ま、わ、り、  
心、の、明、ら、し、  
繁、く、れ、る、は、を、こ、  
お、も、し、か、さ、れ、  
る、と、お、隠、れ、と、徳、  
こ、ろ、こ、ろ、こ、梅、の、こ、ろ、  
熟、梅、と、子、に、こ、ろ、  
成、り、し、こ、ろ、  
亮、仲、実、中、宮、亮、仲、實

と、れ、ぬ、ま、の、ま、あ、ら、あ、り、  
こ、ろ、こ、ろ、人、乃、こ、ろ、  
に、子、を、こ、ろ、こ、ろ、  
子、を、梅、と、せ、り、  
り、  
よ、人、を、  
繁、く、れ、る、は、を、こ、  
こ、ろ、こ、梅、の、こ、ろ、  
塔、の、院、淨、時、中、宮、乃、女、房、を、  
亮、仲、實、の、紀、伊、  
り、備、を、人、と、こ、ろ、こ、

乃實

人、乃、子、の、心、乃、り、  
あ、ら、れ、ぬ、身、に、心、乃、  
立、り、い、て、情、乃、  
人、乃、子、と、は、ま、り、  
ま、り、ひ、ま、り、  
れ、ぬ、着、の、備、と、  
り、ま、り、ま、り、  
保、實、乃、か、り、  
ま、り、の、女、乃、  
か、り、  
こ、ろ、こ、ろ、  
鏡、の、早、乃、  
事、乃、人、の、  
乃、ね、い、こ、ろ、

あ、ら、れ、ぬ、ま、の、ま、あ、ら、あ、り、  
り、  
人、乃、子、の、心、乃、り、  
あ、ら、れ、ぬ、身、に、心、乃、  
保、實、乃、か、り、  
乃、所、乃、  
乃、れ、い、  
て、よ、め、  
乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、  
乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、  
乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、  
乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、乃、

前中宮甲斐  
皇在宮大進  
孝孝女

若原実信母  
保實の家

あつらひてまね  
そのまゝに

あつらひて

往生極楽を祈ふ  
心は物もあつらひ

とるもあつらひ

よもの心あつらひ

延任志門とや

受領任限孝謙天皇の

天平寶字二年六月と

定まらう續日本紀

仁明天皇承和元

年七月諸國八四年

陸奥出羽大宰府任

限五年と定まらう

月乃入ぬるとよめる

源師賢朝臣

あつらひてあつらひ

ひつらあつらひや

為仲朝臣陸奥守と  
延任志門と

延任志門と

藤原隆資

まの我をあれ八十

あつらひて

まの我をあれ八十

とよきは月ハ  
任限そのまゝに  
く流すと延任と

まの我をあれやうら

西武隈河ハ奥列

まの我をあれやうら

て海は遠き故八十

案の身は遠き

むらさき

今こそ山神のま

春日四所の内武隈

榎命常陸の鹿子の

あつらひて

鹿を祈の候と

ゆんよら

鹿乃あつらひ

ゆんよら 藤原實光朝臣

今こそ山神乃

あつらひて

屏風乃あつらひ

く人もあつらひ

よめる 藤原家経朝臣

ゆんよら

わらや梅乃あつらひ

ゆんよら

立花のりやぬ  
 けや様の御らん  
 身のうちささひ  
 さいのーい助  
 思乃乃孫之長  
 淡路阿闍梨  
 入乃いし  
 世と倦て法  
 本とわ乃多  
 こ只よあ  
 けくい  
 よあ

身うちささひ  
 さいのーい助  
 思乃乃孫之長  
 淡路阿闍梨  
 入乃いし  
 世と倦て法  
 本とわ乃多  
 こ只よあ  
 けくい  
 よあ

心  
 上陽人苦寂多  
 文集三  
 上陽人十六  
 去く楊貴妃  
 て上陽宮  
 且つ六  
 物とひ  
 上陽人自  
 青黛畫眉  
 上陽人の  
 け

青黛畫眉細長  
 源後  
 上陽人自  
 青黛畫眉  
 上陽人の  
 け

か上陽宮よりみれば  
つれづれにみれば  
うめひのよき花も  
まじりて眉細長の  
けしき細くかたう  
くろくろ世といふ  
我が世を捨て人前  
のふとけが如く  
と母のおれ物と  
やんて長く  
孝に 伊勢太神宮  
みくろの司る物  
仁天皇降す内文  
の始り中臣祖大鹿鳥命

おとせしむる人  
よめるを  
僧正行書

僧正行書

くろくろ世といふ  
すしと人  
大中臣捕ま  
比宗に  
こひくわ  
枕を  
かげ

かた

おとせしむる人  
よめるを  
くろくろ世といふ  
すしと人  
大中臣捕ま  
比宗に  
こひくわ  
枕を  
かげ

おとせしむる人  
よめるを  
くろくろ世といふ  
すしと人  
大中臣捕ま  
比宗に  
こひくわ  
枕を  
かげ

歌雅の母

宇治乃平  
うらなほ

ありとのめくが龍舟  
とのふきりり比るや  
うらほ乃うこのまの  
平野に直通乃乃所  
ちまうれを地え  
い本山を志すまの

すすわひて我々の  
世に特別一室を  
あよりくまの  
休ま表やの  
こころは合積云  
て家につけてまの  
こころ人の流傳  
いふまはゆり

家ハ冷泉塔乃乃  
おと乃すすの  
うらほ乃うこのまの  
内いほのゆり  
休ま表やの  
こころは合積云  
て家につけてまの  
こころ人の流傳  
いふまはゆり

と強かりのめく忠快法師

うらほ乃うこのまの  
お正中くるおまうこころ  
家を人子をおちりて  
おまはげつくる因坊内傳

すすわひて我々の  
志のわたりてまの  
おまはげつくる因坊内傳  
おまはげつくる因坊内傳  
おまはげつくる因坊内傳

うらほ乃うこのまの

おまはげつくる因坊内傳

すすわひて我々の  
あふこのまの  
おまはげつくる因坊内傳  
おまはげつくる因坊内傳  
おまはげつくる因坊内傳



花鳥集よこたへん  
のちうとていほのそ

るへんあわかつる  
心へ借れりきり  
何しとあやうし  
らんそあやうし  
るきとてしきり  
そしとてしきり  
てあやうしとて  
何それとてあやうし  
の運を大切とて  
うしきとてあやうし  
の早下のあやうし  
一本をあやうし  
らうしとて

おのいふたはうしよめ

白居家大氣

るへんあわかつる。物なすきよめ

きしとのあやうしとてあやうし

大原乃の運智人のあやうしとて

の早下のあやうし。天台座主仁覚不詳

何それとてあやうしとてあやうし

とてあやうしとてあやうし

百首并乃申よ述懐乃とて

よめ。源信親朝臣

世乃申うらまゝ  
母乃とてあやうし  
とよめりいふ家  
るへんあやうし  
月切えの鬼供とて  
りりて舞うしとて  
神多國とてあやうし  
うしとてあやうし  
おのいふたはうし  
とてあやうし  
とてあやうし  
とてあやうし

世乃申うらまゝの影をわや

おのいふたはうしとてあやうし

男にけし越あはらわらわ

とてあやうしとてあやうし

とてあやうしとてあやうし

とてあやうしとてあやうし

うらまゝのあやうしとてあやうし

とてあやうしとてあやうし

とてあやうしとてあやうし

とてあやうしとてあやうし



多きものわたりて  
その影の手添う  
可なりしころう

目乃いかりの  
帝乃はあま  
天下の普  
いと  
はあま  
あまの  
彼や  
帝乃  
う

中絶  
くも  
は後  
日乃い

わ  
これ  
巨く  
わ  
あま  
さ  
そ  
金九元

雑部下

びり  
心明  
ね  
根  
う  
は  
え

金葉和歌集巻第

雑部下

公  
さ  
さ  
び  
あ  
中  
は

同月詩 花梅  
無益梅とつる 花  
心身今鏡北の梅の  
日長をいふ事には  
こころけりけり

あふりしもの  
ほろあつにちや衣  
まふとさふひひ  
あつゆらひひひ  
あつとさふひひ

一第宮 聰子内親王  
後三条院はいすめ

こころのしとさめし年とさめし  
人こころのしとさめし  
ゆりこころのしとさめし  
あふりしものさめし  
けりけりけり 平基綱  
あつゆらひひひ  
あつとさふひひ

後三条院くれかりけり  
又月一第宮乃清信子  
あつとさふひひ

花原青社 徳道寺  
細子と名なる花  
あつとさふひひ  
あつとさふひひ  
あつとさふひひ

あつとさふひひ  
あつとさふひひ  
あつとさふひひ  
あつとさふひひ  
あつとさふひひ

あつとさふひひ  
あつとさふひひ  
あつとさふひひ  
あつとさふひひ  
あつとさふひひ

あつとさふひひ  
あつとさふひひ  
あつとさふひひ  
あつとさふひひ  
あつとさふひひ

分方に徳をまじ

今後うけり

うりりや結うまね

十年の別乃らうり

結の懸ひのさうり

ひよと十年も赤懸と

ひ乃ねは結うり

一年とねれの別のさ

うりやうり結う

結うり今後六

柱金多はれめこの乃

ちされくは結う

野とらゆは結う

作一次の年の結うれ

康徳貞王母徳母

母

と後懸ひのさうり  
うりりや結うまねとおひひ

二さうりひ乃ねは結う

ひ乃ねは結うり  
さうり

わられ乃さうり

下篇うりさうり

りりりりりりりりり

せさうりりりりりりり

乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃

ゆりゆりゆりゆりゆり

めのととれは

結うり今後六

柱金多はれめこの乃

ちされくは結う

野とらゆは結う

作一次の年の結うれ

乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃

よふ人志

まさしくけあけさせ  
 父母乃子とらうと今  
 塵をくらすとやい  
 とうとうとやと様  
 乃子にふ塵をよめ  
 事やよあわゆと堂  
 さい二歌いして使  
 こそおとさねとて母  
 の要事なふとらふと  
 傳信をせよとて落  
 感事またにはお送和  
 けいふふふふふふれ  
 せい便けふふふふふ  
 回さぬとてこのや  
 男ふふふふふふふ

まさしくけあけさせ  
 せいがやあつとやい  
 大げさう子ま推しく  
 くらううのまはけつ  
 男ふふふふふふふ  
 やんふふふふふふ  
 せいふふふふふふ  
 かいふふふふふふ  
 かいふふふふふふ  
 せいふふふふふふ  
 かいふふふふふふ  
 せいふふふふふふ  
 かいふふふふふふ  
 せいふふふふふふ  
 かいふふふふふふ  
 せいふふふふふふ  
 かいふふふふふふ

荻原知信母

三十三

男ふふふふふふの  
 うち何んをけつとて  
 けふ事あつとて  
 まさしく物あつとて  
 せい便けふふふふ  
 回さぬとてこのや  
 男ふふふふふふ

まさしくけあけさせ  
 せいふふふふふふ  
 かいふふふふふふ  
 せいふふふふふふ  
 かいふふふふふふ  
 せいふふふふふふ  
 かいふふふふふふ  
 せいふふふふふふ  
 かいふふふふふふ  
 せいふふふふふふ  
 かいふふふふふふ  
 せいふふふふふふ  
 かいふふふふふふ  
 せいふふふふふふ  
 かいふふふふふふ

荻原通宗親書



母乃くうえき君  
よありて傍乃熱  
係せしむれは

母乃熱せしむ  
えき君の傍あり  
くうえき君の  
よありて傍乃熱  
係せしむれは

さむらひのつれは  
人乃むすめ母乃熱  
かゝるはあつた  
もんきんはあつた  
うりくうい  
母乃熱せしむ  
おれはあつた  
年ころあつた  
はうりくうい

金十

母乃熱せしむ

母乃熱せしむ  
えき君の傍あり  
くうえき君の  
よありて傍乃熱  
係せしむれは

られ

和泉武部

母乃熱せしむ  
えき君の傍あり  
くうえき君の  
よありて傍乃熱  
係せしむれは  
陽明門院か



一生此果ハ穴幕ハ  
燗と燗して予ハ安  
斗こしうきこの  
心をうけてよめり

少いあまの世をうきま  
心明く陽明門院ハ  
禎子内親王三条院皇  
女母杜妃皇太后宮嬪子  
嘉祥元年正月十六日薨  
白河院乃女帝 道子  
ヤ内大臣能長女  
孝安もろしむひりか  
ねよあめりうきま  
ねあもろしむひりか  
ねあもろしむひりか

ははわさのうきま  
よめり  
たけ  
藤原資信

少いあまの世をうきま  
この年 孝安もろしむひりか  
白河院乃女帝 道子  
乃南面乃女帝の薨盛に  
よめり 僧正御子  
孝安もろしむひりか  
ねあもろしむひりか

こいゆい  
兼房朝臣前遺言  
中納言兼隆子也  
之の重服ハ兼隆  
わろしむひりか  
かろしむひりか  
別一箇室の世ハ  
のせはてうきま  
てあまの世を  
さくうせぬま  
すまよめり  
今うきま  
わろしむひりか  
と也

兼房朝臣重服もろしむひりか  
てあまの世を  
わろしむひりか  
中一あり  
橘元包 永徳子  
カ内親王五下  
かろしむひりか  
何れハ人  
範囲朝臣  
まろしむひりか  
まろしむひりか  
まろしむひりか  
まろしむひりか

ち 伊あるに即絶定  
 一言に伊あるに即絶定  
 三つの邪こそこと  
 あまの川をえとる  
 天々のあまの川をえ  
 こそ神カよと天河の  
 と言代るにせとる  
 してあつとせとる  
 心経般若心経秘鍵 遍照  
 金剛撰云、大般若波羅  
 密多心経者即是大  
 般若菩薩、大心真言  
 三摩地法門、後云、或云、  
 略出大般若經、心要故、名  
 心、不是別會說、猶秀

多くはあのかたに  
 こそ手いられし  
 周あよすく  
 こそ手いられし  
 能周法師  
 あまの川をえとる  
 何ゆくりあますか  
 神威あつとる  
 やますと家集り  
 心経供養  
 侍りよよ  
 持政大臣

金十七

心経云、色即是空、  
 無色、香、味、觸、法、と  
 諸法をえとる  
 と除、一切苦の  
 多くはあのかたに  
 こそ手いられし  
 周あよすく  
 こそ手いられし

心経云、色即是空、  
 無色、香、味、觸、法、と  
 諸法をえとる  
 と除、一切苦の  
 多くはあのかたに  
 こそ手いられし  
 周あよすく  
 こそ手いられし  
 月乃あつとる  
 膽西上人  
 廿三サヤ

しんりゃくしんりゃく  
しんりゃくしんりゃく  
しんりゃくしんりゃく  
しんりゃくしんりゃく  
しんりゃくしんりゃく  
しんりゃくしんりゃく  
しんりゃくしんりゃく  
しんりゃくしんりゃく

しんりゃくしんりゃく  
しんりゃくしんりゃく  
しんりゃくしんりゃく  
しんりゃくしんりゃく  
しんりゃくしんりゃく  
しんりゃくしんりゃく  
しんりゃくしんりゃく  
しんりゃくしんりゃく

しんりゃくしんりゃく  
しんりゃくしんりゃく  
しんりゃくしんりゃく  
しんりゃくしんりゃく  
しんりゃくしんりゃく  
しんりゃくしんりゃく  
しんりゃくしんりゃく  
しんりゃくしんりゃく

しんりゃくしんりゃく  
しんりゃくしんりゃく  
しんりゃくしんりゃく  
しんりゃくしんりゃく  
しんりゃくしんりゃく  
しんりゃくしんりゃく  
しんりゃくしんりゃく  
しんりゃくしんりゃく

十一

依釋迦遺教念阿泥陀  
般舟三昧經云跋陀和  
菩薩請釋迦牟尼佛  
言未來眾生云何得  
見十方諸佛佛教念  
阿泥陀以此佛持之  
婆衆生有緣之經の

依釋迦遺教念阿泥陀  
般舟三昧經云跋陀和  
菩薩請釋迦牟尼佛  
言未來眾生云何得  
見十方諸佛佛教念  
阿泥陀以此佛持之  
婆衆生有緣之經の

意の...  
釋迦と月よりして  
くも六人の心まを思  
ひてわらわらと  
東凡いひりてあま  
吹くをく見さる  
うき塵とまきま  
えくくはる塵を  
とけせのるを  
くもくも  
我我欲命終時安  
華嚴異譯之普賢  
願行品云願我臨終  
終時盡除一切諸障

いづくころをあよりけり  
法海上人はせをれをうりさひは  
かか入るわをふれりすは傍のま  
よみけり  
わくをうかこちてふ月のうを  
ちりなりういそのことすし  
普賢十教乃又よ我我欲命  
終時とて久をよめり  
号東南院僧都六名を各に  
覚樹法師 亦大  
のちもは子もあがりことわり

金十九

礙面見彼佛阿弥陀  
即得往生安樂刹  
のらもは子も  
命終の時一切の障礙  
あく往生す  
衆罪如霜露の心と  
衆罪如霜露  
普賢觀經曰若欲  
悔者端坐思實相衆  
罪如霜露惠日能消  
除  
は分もは子も  
くもは助字小を  
てく欲懺悔者思實相  
うきをとりり

きくは子もあやまらん  
衆罪如霜露とて久をよめり  
覚樹法師  
は子もは子もあがり  
あきすす  
才子果乃心をよめり  
僧正靜圓  
あきかとりり  
ころもり  
提婆品乃心をよめり  
瞻西上人

才子の衣裏寶珠の  
三後拾遺世小童  
のり乃らあふさう  
弘乃控前のの拾遺  
あし事少らうて海  
小うて入於なるぞ  
し前なる海況し  
りあうさうわのさね  
月をさるる出さう  
彼人少う一人の旨  
の仏と今知さう  
竜女成佛そ提摩  
ふく文珠の海守さ  
は海經とさるる八  
案の竜女成佛せ

のり乃らあふさう  
やうさう世をさう  
皇法宮権大支師時  
さうさうわのさね  
谷川くさう人乃り  
竜女成佛をよめ  
勝超法師  
わの海乃らあふさ  
いさうさうの力さ  
涌出品乃らあふさ

事也すさうら法經  
子皆遙見彼竜女成佛  
こあり  
わのり乃らあふさ  
海經とさるる八  
はるこ乃藻屑とさ  
南方す垢世身り  
海しと月とさるる  
くちねはるさあ  
滅乃はは海經と  
八恒河沙乃ねさ  
券属をさうと地  
彼世量とさるる  
志あうこのさう  
さう四十餘年乃

推僧正永縁  
くちねはるさあ  
こさうさう人さ  
はるこ乃藻屑と  
南方す垢世身り  
海しと月とさる  
くちねはるさあ  
滅乃はは海經と  
八恒河沙乃ねさ  
券属をさうと地  
彼世量とさるる  
志あうこのさう  
さう四十餘年乃



五百弟子授記品 お集注

繫寶珠 二のうらう

けりしる 益昭の肉を將  
ちりしりしりあま

いりしりしりのまを  
かの我家のうらふけし

いりしりしりのまを  
すす明の肉を解す

いりしりしりのまを  
いりしりしりのまを

いりしりしりのまを  
あつしりしりのまを

いりしりしりのまを  
いりしりしりのまを

入乃しりしりしり 經供書

五百弟子授記品 乃心をとまひりしり

繫寶珠 乃事れしりしりしりしり

いりしりしりのまを  
けりしりしりのまを

いりしりしりのまを  
けりしりしりのまを

いりしりしりのまを  
けりしりしりのまを

いりしりしりのまを  
けりしりしりのまを

いりしりしりのまを  
けりしりしりのまを

いりしりしりのまを  
けりしりしりのまを

いりしりしりのまを  
けりしりしりのまを

依他乃八のうら

い本 維摩經依他乃  
八乃しりしりのまを

い本 維摩經依他乃  
八乃しりしりのまを

い本 維摩經依他乃  
八乃しりしりのまを

い本 維摩經依他乃  
八乃しりしりのまを

い本 維摩經依他乃  
八乃しりしりのまを

い本 維摩經依他乃  
八乃しりしりのまを

い本 維摩經依他乃  
八乃しりしりのまを

い本 維摩經依他乃  
八乃しりしりのまを

とよめる

懷尋法師

いりしりしりのまを  
けりしりしりのまを

いりしりしりのまを  
けりしりしりのまを

いりしりしりのまを  
けりしりしりのまを

いりしりしりのまを  
けりしりしりのまを

いりしりしりのまを  
けりしりしりのまを

いりしりしりのまを  
けりしりしりのまを

いりしりしりのまを  
けりしりしりのまを

いりしりしりのまを  
けりしりしりのまを

いりしりしりのまを  
けりしりしりのまを

乃性ありて幻乃とて多力こころありて皆解乃  
おちるともくすくす心身勿論眼より見再々つらき偏皆實  
にあるおちのふ計て執心一無常なり生死乃若く受るを  
偏計所執性と云也されハハ乃喻を以依他起を明とするハ棋大業端  
り物とてさす也集りつらきも本三維一經乃依他  
ハ乃喻とす用いさす也維一經も依他乃義のあれと  
さ語のあきとす身ハ幻乃とてさす維一經方便品の中  
何とてあてはくも動くとわささす本何とて依他乃共に  
わく洞とてさす也作らさす  
いんをいんとてさすわく洞とてさす也出也幻乃とてさす  
いん畢竟とてさすわく洞とてさす也いん何とてさす  
かけり乃乃わく洞とてさす也いん如幻乃とてさす  
といんを出離生死乃期とてさす也いん如幻乃とてさす  
乃其悟とてさす也いん生死とてさす也いん如幻乃とてさす

暫じれ飛れと云々の  
常任心月輪 心地観經  
九支那觀菩提心相續如  
清淨圓滿月輪於胸  
臆上明朗而住  
竟猛菩薩菩提心論  
我見自心形如月輪  
三三三乃文此心也  
よももに心乃らふ  
九心乃學的の園  
志り一宵梅屋  
心と常に胸臆の上  
任と志り三三三の  
勝る也いあれとて  
よも乃らふ梅屋

常任心月輪とてさす也いん  
沈成法師 沈成法師  
よももに心乃らふすむ月を  
いんを志りさすもさすもさすも  
いんを志りさすもさすもさすも  
よも乃らふし乃流しとてさすも  
あふ乃らふし乃流しとてさすも  
醍醐乃金剛會乃乃のちるもさす  
よめる 源後於朝臣  
いんを志りさすもさすもさすも  
いんを志りさすもさすもさすも





不果遂不取正覚と  
是乃今のあつゝの  
誓願を人の心  
あつねよむを  
何年よむを  
弘誓乃如子持の  
梶をわたりて  
苦海をこえん  
と

連歌 今後云舟の  
情のうらふ  
とて連歌を  
よむわ  
は金葉集  
と

よめ  
源俊賴  
乃今と  
志を梶  
あつね  
海をこ

連歌

あつね人乃  
わらわら  
とて人乃  
永成法師  
あつね人乃  
とて人乃  
永成法師

筆 丈

あつねの  
梅はのうめ  
是も對付  
一条大文  
梅はのうめ

律師慶範  
あつねの  
公資  
梅はのうめ  
あつねの  
公資  
梅はのうめ  
神皇成助

志乃のうらうらまね  
梓を眞禰まうそ  
そり

いりまゝ神めつ  
神乃人りつ  
いりまゝあま

いりまゝ指合  
る付に比の何は也  
若い吟味せ

春乃田りすま  
田とすま  
てくすま

乃子まくら  
田のまら  
うて

志乃乃うらうらまね乃若  
初重

いりまゝ神乃はく  
宇流まくら  
の伏り

春乃田りすま  
儒源田光  
車

乃子まくら  
宇流入道お天政官

田のまら  
觀運法師

のせえや蕪生  
目乃つる  
へり

あつね  
り  
苗

田  
思を

苗代乃  
氣を  
り

目乃つる  
平為成

あつね  
田中  
永源法師  
肥後権吉  
教録子

田  
永成法師

苗代乃  
か  
り

助成助後

ほろろわくやくや  
堀とわく瓦に作る  
と板倉作る櫓をう  
つくし

志加活花お糟屋郡  
也け沼の久く海守に  
何とと度乃らむら  
まきまきしとまきま  
くくくく  
弓より乃力めつ  
月の入と矢と射  
くくくく

ほろろわくやくやつらりるめん  
イ氏一の志の  
志の沼とて為助

四忠

弓より乃力めつ  
空路すうりよりなるるまきく日比  
而此隊まれの乃出く雲女河  
と男乃とるををぬきくくく  
サテ  
掛つはるるる頼綱朝臣

軍十七

かほいほをほるまき  
すまきくめけを  
鶴鷹とくく時と  
落しと射して  
りりりりりりりりり  
借袴のぬき人を  
可しくと居と  
と射して付し  
あまあゆるまゆめ  
帚本まきくまきま  
わう何わうと何  
くあゆる心と結る  
く何とく乃まきと  
務母はいりりりり  
務母は節をく

かほいほをほるまきくくく

信綱

りりりりりりりりり  
あゆまきく務人志  
あまあゆるまゆめ  
匡房の妹

務母はいりりりりりりりりり  
和泉式部のくまきくわくわく  
麻は足をくれて紙をまきく  
くくくく神と志就

を多とてうたれは魚  
もつたあつたうた  
ふとやうのうたを  
これをうたひの社  
源祖神と下の社とい  
つたは鷹をよぼす故  
りまののやうにこと  
おそく思ひま神方  
下これをうたひのやう  
こつたうたのうた  
うたをうた

こつたうたのうた  
うたをうた

ふとやうの神とつたうた  
和泉式部

これをうたひの社  
源祖をうたひの社とい  
つたは鷹をよぼす故  
りまののやうにこと  
おそく思ひま神方  
下これをうたひのやう  
こつたうたのうた  
うたをうた

源頼光朝臣

あつたうたのうた  
唐船と幸きとつた  
うたをうた  
つたうた  
花をうたひの社  
花をうた

風乃をうたひの社  
風乃をうた

これを連なりうたひの社  
相模母 花をうた  
あつたうたのうた  
花をうたひの社  
花をうた

お太政大臣家ゆたう

風乃をうたひの社  
あつたうたのうた  
あつたうたのうた  
あつたうたのうた  
あつたうたのうた  
あつたうたのうた  
あつたうたのうた

いづれにこそしきり  
おぼれはなほうら  
し

いづれにこそしきり  
おぼれはなほうら  
し  
おぼれはなほうら  
し  
おぼれはなほうら  
し

あつれにこそしきり  
雉と志とさうめり  
事と鴨鳥よめり  
かきかきさうめり  
鶺鴒をなほうら  
し  
あつれにこそしきり  
あつれにこそしきり

あつれにこそしきり  
雉と志とさうめり  
事と鴨鳥よめり  
かきかきさうめり  
鶺鴒をなほうら  
し  
あつれにこそしきり  
あつれにこそしきり

あつれにこそしきり  
あつれにこそしきり  
あつれにこそしきり  
あつれにこそしきり  
あつれにこそしきり  
あつれにこそしきり  
あつれにこそしきり  
あつれにこそしきり

あつれにこそしきり  
あつれにこそしきり  
あつれにこそしきり  
あつれにこそしきり  
あつれにこそしきり  
あつれにこそしきり  
あつれにこそしきり  
あつれにこそしきり

あつれにこそしきり  
あつれにこそしきり  
あつれにこそしきり  
あつれにこそしきり  
あつれにこそしきり  
あつれにこそしきり  
あつれにこそしきり  
あつれにこそしきり

あつれにこそしきり  
あつれにこそしきり  
あつれにこそしきり  
あつれにこそしきり  
あつれにこそしきり  
あつれにこそしきり  
あつれにこそしきり  
あつれにこそしきり

くわんくわんひるもわく  
よもろくろくわん  
系乃極し

かきふるもやりの  
柱を搦こり相り  
つく奥のまゝ

こりやま  
見わたる海  
戸をかまう  
内糸を對して

あころちよみらぬ  
演ひきい漢の家  
又さき初めゆけ  
しるの底のこころ  
ぬを云えの枕

柱をこく  
成光  
かきふるもやりの  
観蓮法師

見わたる海  
七十よま  
よりのま  
はくけく  
源俊賴

あころちよみらぬ  
久しき  
あころちよみらぬ  
久しき

ぬを云えの枕  
しるの底のこころ  
ぬを云えの枕  
しるの底のこころ

あころちよみらぬ

涼風森山懐く  
乃ちまをま  
わん  
生松原ハ籠  
せめ  
こり  
ぬを云えの枕  
しるの底のこころ

吳本

美第七 五舟上

折返る大長家  
あころちよみらぬ

菟原為志  
直一  
もま子

あころちよみらぬ  
よこ  
れり  
あころちよみらぬ  
あころちよみらぬ  
在るまの下のま

とてあつてしむ  
山乃寺合殿山乃寺合殿  
此れなりとてあつてしむ  
いきていきて九十九  
ふもふもくしてしむ  
情やあんとてあつてしむ  
くるとしむとてあつてしむ  
ふせめていふふれぬ  
ぬれぬとてあつてしむ  
ぬれぬとてあつてしむ  
何とてあつてしむ  
何とてあつてしむ  
何とてあつてしむ

山乃寺合殿とてあつてしむ  
隆光法師 真福業信  
在る影下殿とてあつてしむ  
無乃とてあつてしむ  
何とてあつてしむ  
あつてしむとてあつてしむ  
あつてしむとてあつてしむ  
あつてしむとてあつてしむ  
あつてしむとてあつてしむ  
あつてしむとてあつてしむ  
あつてしむとてあつてしむ

金十・九

とてあつてしむ  
左今山町寺の御也  
情乃饒摩とてあつてしむ  
とてあつてしむ  
とてあつてしむ  
とてあつてしむ  
とてあつてしむ  
とてあつてしむ  
とてあつてしむ  
とてあつてしむ  
とてあつてしむ  
とてあつてしむ

とてあつてしむ  
とてあつてしむ  
とてあつてしむ  
とてあつてしむ  
とてあつてしむ  
とてあつてしむ  
とてあつてしむ  
とてあつてしむ  
とてあつてしむ  
とてあつてしむ  
とてあつてしむ

延寶八年五月廿七日深草西園六月廿七日注解平 季吟



金平北二

